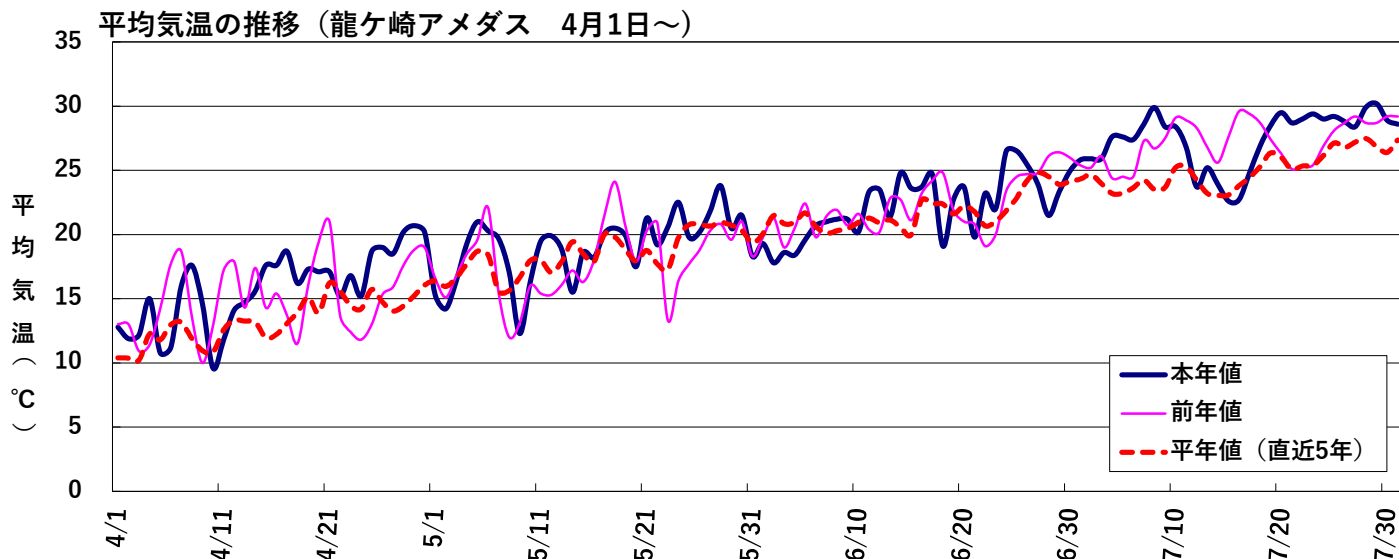


令和6年度 水稻生育状況と今後の管理について (成熟期)

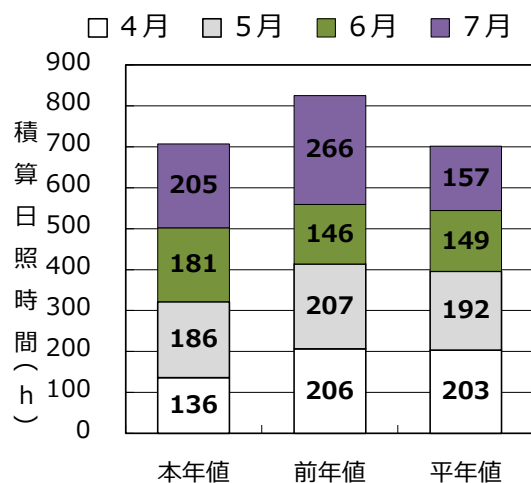
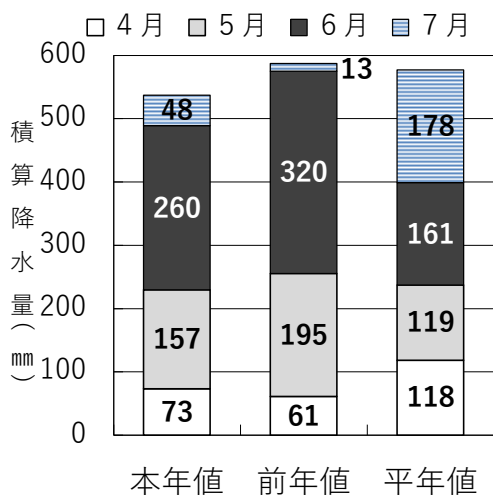
令和6年8月6~7日(火~水)
稲敷地域農業改良普及センター

1. 本年の気象状況 [4/1~7/31]

(1) 日別平均気温の推移



(2) 降水量、日照時間の積算値



気象状況	4月1日~7月31日	
	平年比	(参考) 前年比
平均気温	+1.5°C (やや高い)	+0.5°C
降水量	93% (平年並み)	91%
日照時間	101% (平年並み)	86%

- 今後の気象予報 (関東甲信地方の1ヶ月予報: 8/1 気象庁発表【予報期間: 8/3~9/2】)
- ・ 向こう1か月の平均気温は高く、降水量と日照時間はほぼ平年並の見込み。

<病害虫防除所発表の病害虫発生予報 (8月号) より>

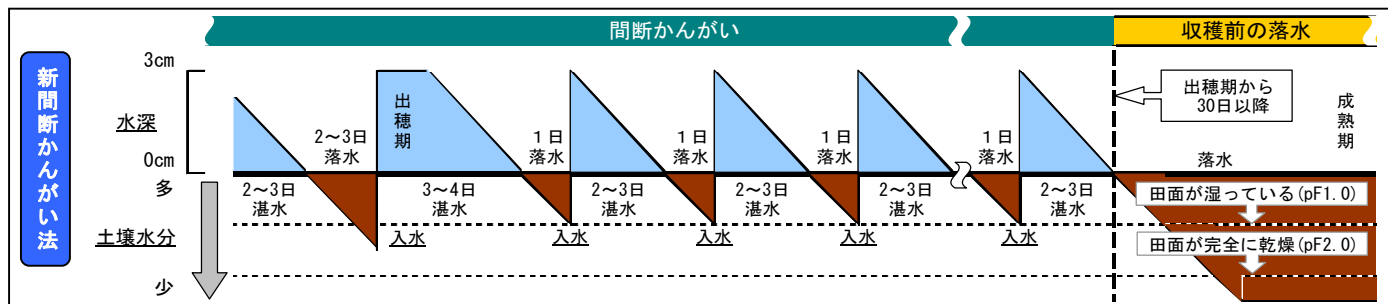
- ・ いもち病 (穂いもち): 発生量は平年並
- ・ 紋枯病: 発生量はやや多い
- ・ 斑点米カメムシ類: 発生量はやや多い~多い

2. 今後の管理

(1) 登熟期の水管理（間断かんがい法）

登熟期間中は間断かんがい（田面が乾く前に入水し、自然落水を繰り返す）を行う。

あきたこまちは出穂期以降 25 日まで、コシヒカリは 30 日まで続け、その後は田面が乾きすぎると走り水をするなどして対処する。



間断かんがいのポイント

- 出穂直前から出穂期の3～4日間は、水不足にならないように湛水を保つ。
- 入水時期の田面の感触は、やや砂目の土壌では水が残っていないものの、田面に触れると湿り気を感じる程度とする。
- 暗きよのあるほ場は、水甲の調節により入水間隔を調整する。降雨が続いて湛水状態が続く場合は、水が張りっぱなしにならないように排水する。

(2) 高温による影響と対策

登熟初期～中期（出穂後20日頃まで）の高温で乳白粒が、中期～後期（出穂後20日前後）の高温で背白粒が増加する。また、夜温が高いと呼吸による消耗が大きいいため、玄米千粒重の低下（特に粒厚の減少）が懸念される。

対策

- ・ 根の活力低下の防止と登熟促進のため間断かんがいを徹底する。
- ・ 出穂期後25～30日間は落水を避ける。

出穂期後日数	-2日	0日	+2日	+10日	+20日	+30日	+40日
生育段階	出穂始め	出穂期	穂揃期	乳熟期	糊熟期	黄熟期	成熟期
高温の影響		乳白粒増加の恐れ			背白粒増加		
強風の影響	不稔の恐れ				倒伏や脱粒の恐れ		

(3) 斑点米カメムシ類の防除

【被害】 籾を吸汁することで不稔や玄米に斑点が生じる。また、被害が多いと品質や収量が低下する。

表1 水田内における斑点米カメムシ類の地域別生息状況 (令和6年7月上旬調査)

地域	調査地点数	すくい取り虫数(頭/10回振り)			発生地点率(%)		
		本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北	8	0.81	0.65	2	38	24	2
県央	15	0.37	0.29	5	40	19	1
鹿行	6	0.17	0.09	3	33	13	2
県南	19	2.76	0.15	1	37	14	1
県西	9	7.61	0.11	1	56	17	1
全県	57	2.35	0.24	1	40	16	1

1) 平年：平成26年～令和5年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位：本年を含む過去11年間における本年値の順位を示す。(3-4は3位から4位まで同じ数値であることを表す。)

病害虫発生予察注意報第2号より (茨城県病害虫防除所)

水田内ですくい取り調査をした結果、今年を含む過去11年間で最も発生量が多い

～カメムシ類防除のポイント～

① 畦畔の除草管理

出穂間際の草刈りはカメムシ類をほ場内へ追い込むため、出穂2週間前までに済ませる。

② 薬剤防除

出穂期～穂揃期

飼料用米の基本！

飛来した**成虫**を防除 → **不稔の発生減** (産卵数減 (幼虫数減)) → **減収を防ぐ+** **斑点米の発生減**

特に「イネカメムシ」の防除適期は出穂期 (早めに散布することを心がける！)

乳熟期 (出穂後10～15日頃)

主食用・加工用米の基本！

孵化した**幼虫**を防除 → 幼虫を少なくする → **斑点米の発生減**

カメムシが多発生ときは・・・

出穂期～穂揃期に防除

さらに
7～10日後

追加防除



イネカメムシ

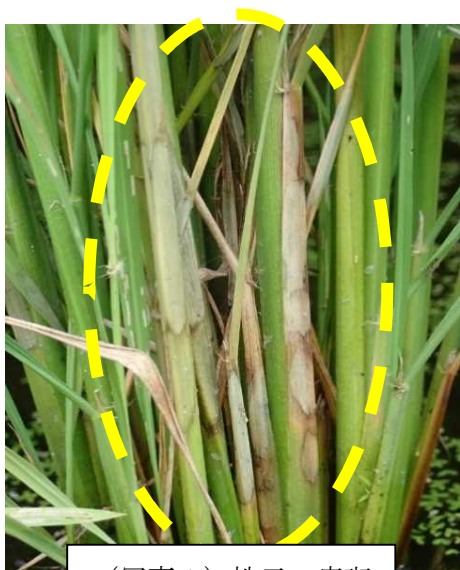
(4) 病害防除

紋枯病

【被害】地際に近い下部の葉鞘に楕円形の大きな病斑を生じる（写真1）。
上位の葉鞘まで進展すると、未熟粒の増加や千粒重の低下により減収する。
また、下葉から株元が枯れて倒伏しやすくなる。

【原因】前年の被害株に形成された菌核（写真2）が越冬し、伝染源となる。
高温多湿条件で発生が助長される。

【防除】穂ばらみ期～出穂期に、株元までしっかり薬剤がかかるように散布する。
発生が確認された圃場では、翌年以降、育苗箱施用剤を使用する。



(写真1) 株元の病斑



(写真2) 病斑上に形成された菌核

(5) 収穫

刈り取りの適期は、成熟期（帯緑籾率10%）から5日間程度である。

出穂後35～40日程度が目安だが、気象条件や生育により変動するため、必ず下記の方法で帯緑籾率を確認する。

【帯緑もみ率の確認方法】	帯緑籾率 (%)	収穫適期
① 平均的な生育の5～10株程度を選び、 丈が最も長い茎から穂を採取する。	20	6～7日前
② カルトン上で穂から籾を外し、 軽く吹いて不稔籾を飛ばす。	15	4～5日前
③ 帯緑籾率を確認する。	10～5	適期
	3	刈り遅れ

※倒伏した場合

- ① 穂発芽等が予想される部位は別に収穫・乾燥調製し、全体的な品質低下を防ぐ。
- ② 倒伏用デバイダを活用し、低速で収穫する。